

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	徳富蘇峰と北村透谷：変容と夭逝の道程
Author(s)	槇林, 滉二
Citation	近代文学試論, 61 : 1 - 12
Issue Date	2023-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/54891
URL	https://doi.org/10.15027/54891
Right	
Relation	



徳富蘇峰と北村透谷

― 変容と夭逝の道程 ―

はじめに

私はかつて、徳富蘇峰と北村透谷と、その初期、多くの類同するところがあつた事について小考した¹⁾。別界の人と思われた二人に、蘇峰の先行、透谷の後追い、文学に思想に多々重なるところがある。しかし、中、後期、二人は大きく別れる。本考はその追記である。

まずは、蘇峰の中・後期の変容とその後景について、次いで北村透谷の後期、自死に到る道行きと動向、その意味するところについて、蘇峰の変容にかわりながら、触れてみたい。

蘇峰の変化はその生活や思想動態の全容にかかわる、私は「変化」だけでなく、「変容」とも記してみたい。あわせて、透谷の自死は、一つの喪失を意味するところもあり、「夭逝」と記す。

一、徳富蘇峰の変容とその後背

蘇峰の変容から記す。若き日、蘇峰は『将来之日本』（明19・10 経済雑誌社）、『新日本之青年』（明20・4 集成社）を出梓、更には『国民之友』（明20・2）、『国民新聞』（明23・

榎林 滉 二

2)を発刊、平民主義、マンチェスター派による自由貿易主義、民権運動、美や個の自立を論じた文学論や教育論など鮮烈な近代開示の論を展開、優れたオピニオンリーダーとして、近代初期の日本を領導した。

しかし、明治二十七八年の日清戦争とその後の三国干渉の中、その論調や生のあり方は大きく変化、変容していく。加えて、その変化の後背に横井小楠、勝海舟、吉田松陰等の影響があつた気配がする。それらを追う。その動きはただに蘇峰の変化にとどまらず、日本近代化の変質にかかわるところがあつたように思われる。

以下、それらの変化とその後背について、順次追っていききたい。

(1)、二つの変容―近代化(西洋化)との別れ―

前記のように、日清戦争、下関条約、三国干渉後の蘇峰の変化とその後の日本国体にかかわる変容について辿る。大きく二つの蘇峰の変化を記すが、最終的には一つに集約するものであろう。

三国干渉後の変化について、蘇峰の証言を二つ記す。一つは『時務一家言』(大2・12 民友社)における「緒言」とその論要について。次のように記している。

「予は二十八年春遼東半島に赴き、我か馬関条約によりて割譲せら

れたる地域を踏査し、以て将来大陸発展の経綸を立てんことを企てたり。行程一週旅順に帰著するや、意外にも遼東還付の事を聞けり、大事去矣、予は直ちに趾の塵を払ひ旅順を去れり。」と記し、「去るに臨み、旅順湾頭より一撮の砂石を手中に包み、齎らし還りて曰く、是我が領土の一片也と。此の如くして此の砂石は、今尚ほ書齋の一隅に保存しつゝある也。」

この一節、三国干渉により割譲予定の遼東半島を失った無念、その直前、「大陸発展の経綸を立てん」と企てていたこと、「一撮の砂石を手中に包み」、「大事去矣」と蘇峰の生涯を変えたことを記している。

次いで蘇峰は「吾人をして言はしむれば、民族的醒覚は力也、民族的活動は力也。」と思念、その力を發揮するため、「我国に帝国主義、平民主義、社会主義の、一貫したる 皇室中心主義の下に行はれざる可らず、又た行はざる可からざるを説けり。」と論を強める。変わりゆく蘇峰の提示である。

蘇峰は続けて、『大正の青年と帝国の前途』（大5・11 民友社）において、更に大きく自己の変化を提要する。

「本書は実に、明治十九年の秋出版したる『将来之日本』、及び十八年の夏著述し、二十年の春、巻頭の一章を加へて、出版したる『新日本之青年』を、根本的に改作したるもの也。」、「予は両書の出版以来、之を訂正するの必要を感じたる一再ならず。特に明治二十七八年役前後に於て、予の政治上、社会上に於ける意見は、多大の変化―予の眼中よりすれば進化―を来たし、切に其の必要を感じた」と記し、次のようにその内容の根幹について、繰り返し主張する。

「(前略) 平民主義、国民主義、国家社会主義を貫申したる皇室中心主義也。君民徳を一にし、挙国一致的の帝国主義也。即ち内に平民主義を行ひ、外に帝国主義を行ひ、而して皇室中心主義を以て、兩者を一貫、統制する也。」

蘇峰はこの「皇室中心主義」を自らの国家、国体論の中核に据え、以降、日中戦争、大東亜戦争(太平洋戦争)時、強く論じ、それは戦後も変わらなかつた。ここで、蘇峰は、若き日に主張した平民主義、国民主義、社会主義等を列記、それらを「貫串」するものとして「皇室中心主義」を提示している。しかしゆつくりとそれらの前掲した主義は、その論理の中から姿を消して行く。二つ目の変容である。

変化、変容してゆく論容を今少し辿る。これらの論理を整理して提示したのは、『国民小訓』（大14・2 民友社）で、皇室を中心とする国体を論じ、国民国体一致の大義を世界に布くことを提要、そのもと、『昭和一新論』（昭2・2 民友社）、『日本帝国の一転機』（昭4・9 民友社）などなど皇室中心の論理の整齊を試みている。国家国体への国民一致を説く。「明治維新」に対する「昭和一新」の提要であろうか。しかし、まだ、初期の平民主義、自由主義との全体的な決別はない。過渡的な整序として次のような弁疏が『昭和一新論』の後期に記されている。

「記者は決して所謂マンチエスター派の放任主義、否干渉主義、個人競争一任主義の随喜者ではない。されど人は信念の上に立たねばならぬ。而して信念は、我が自得に基かねばならぬ。是れ記者が我が自由主義に倦々たる所以。而して此の如く、自由主義によりて個性を築き成したる人にして、始めて能く奉仕的生活の門に入るを得可

きものと思ふ。」

次のように続けてもいる。

「若し或は自由主義を以て、縦恣者、放蕩者、無責任者、無節制者のために口を藉すあらば、是れ実に自由主義の罪人である。大なる自由には、大なる節制と大なる責任とが、必ず伴はねばならぬ。それが伴はざる自由は自由でない。江湖同憂の士は、必ず能く記者の所志を諒とするあらむ。」

自由主義を認容しつつ、制約をつけている。

しかし、日中戦争に突入、当代に出梓した『戦時概言』（昭12・10 民友社）などでは、国民の国家や国体への奉仕を説く中、自由主義、平民主義は姿を消してゆく。

そして、大東亜戦争（太平洋戦争）前夜の『昭和国民読本』（昭14・2 東京日日新聞社 大阪毎日新聞社）、更には戦中、『必勝国民読本』（昭19・2 毎日新聞社）などでは、はつきり、『国民之友』時代の論旨を改め、国家、国体中心の論になっていく。後者から、象徴的な一節を引く。

蘇峰はこの戦いを「自衛自存」のための戦い、「大東亜解放」のための戦い、「世界新秩序建設」のための戦いとして、「其の根本は我が皇国の生命を保全するがために始まり、世界をアングロ・サクソン人の暴戾抑圧より脱却せしむるを以て終りとす。」と記し、西洋抑圧から東亜の解放を志す正義の戦いと称揚、次のように論じる。

「アングロ・サクソンの思想は功利的個人主義である。進化論の法式を人類生活の上に実施するが自由主義である。即ち自由は競争を意味し、競争は闘争を意味し、闘争は優勝劣敗を意味す。斯の如くに

して弱肉強食は自由主義の極楽でもあれば、デモクラシーの天国でもある。然るに我が東亜は人類相愛、社会相親、万邦協和を以て根本主義としてゐる。即ち自由の代りに協同を意味し、競争の代りに互助を意味し、戦闘の代りに平和を意味する。其の結果は即ち共存同榮、所謂『己れ達せんと欲せば人を達せしめ、己れ立たと欲せば人を立たしむ。』は我が東洋思想の根柢である。」

米英など「アングロ・サクソン」を自由主義、進化論の競争と闘争社会、デモクラシー社会と規定、対して「東亜」の世界は人類相愛、万邦協和の平和社会と言う。すなわち、自由主義、デモクラシーに対して、国家主義、協同主義、帝国主義を論ずるのである。

改めて、『将来之日本』、『新日本之青年』の刊行時の蘇峰開示の所に帰ってみよう、蘇峰自身、次のように回顧している。

「これには予の当時有する総ての思想、一切の知識、凡有る学問を傾倒し尽さんと企てたばかりなく、その覚悟で始め、又たその覚悟で終つたものである。予は当時専らスペンサーの進化説や、ミルの功利説や、抑々又たコブデン、ブライト等のマンチエスター派の非干渉主義や、自由放任主義や、若くは横井小楠の世界平和思想や、それ等のものに依つて、予一個の見識を打ち建てたるものであつた。」（『蘇峰自伝』昭10・9 中央公論社）

同書には、次のような戦争反対論があつたことをも記している。

「予は民権論者ではあつたが、武力主義者には飽迄反対した。当時予は民権の敵は武力であると考へ、戦争は武人跋扈の原因をなすものと考へたから、何処迄も戦争には反対した。予の本旨は一言して云へば、マンチエスター・スクールであり、所謂コブデン、ブライト、

グラッドストーンなどの論であった。ルッソーの『民約論』を看板として、武断主義を行はんとするが如き相愛社流とは、根本に於てその趣を異にした。」（『蘇峯自伝』）

「進化論」、「自由放任主義」、「平和思想」、「民約論」、まさしく、『必勝国民読本』で蘇峰の記した「アングロ・サクソン」思想の直流としてあるものであった。蘇峰の「国家主義」、「皇室中心主義」は、これら若き日の蘇峰自身とも対峙していることになる。

少し性急に、しかし、象徴的に記すならば、明治初頭から中葉にかけて、日本近代化の指針は西洋化にあった。蘇峰初期の論要もその直流にあった。対して、中、後期の、国家、団体主義、皇室中心主義への変容は、その反転にある。近代化(西洋化)の道程との別れ、それは、蘇峰のみならず、近代日本の変容の一端を示すものであるかもしれない。

(2)、蘇峰変容の後背の一景

蘇峰はその変容の要因を日清戦後の三国干渉、遼東還付にあったと言う。以降、前記のように若き日の著作等の改廃を提示している。還付の時、蘇峰は「将来大陸発展の経緯を立てんことを企て」ていて、「大事去矣」と嘆じている。

なぜに蘇峰はかくも簡易にこの変容を自らに許したのか。あるいはそれを行って蘇峰は動ずることがなかった、それはなぜか。そのことにかかわり、私は二つのことを思う。その変容の内的な後背の要因に、蘇峰若き日から崇拜してきた横井小楠、勝海舟の影響があるのではないかと小考。その道程について別稿を企図している。論の重なりになるので、今は一例のみ例証として記す。

「それで勝先生が私にいはれた事があります。横井に物を聞いてやれば、返事は、『只今私が考へた所は此の通りであるが、明日になれば又どうなるか判らない。』勝先生が感心してゐる所は、今日の場合では之である、今日といふ其の時間にちゃんと制限をつける所が横井先生の偉い所である。普通の人なら之でやり抜くといふ事がある。無理をするが、先生には決してそれが無い。」（『維新の大業と横井小楠』へ『時勢と人物』昭4・10 民友社）

小楠は「只今」、「今日」の制限をつけ、その後の状況により随時それに応じて論を変える、そのことを恥としない、海舟もそれを賞讃する。「変化」は「変節」ではない。こういった、時や情勢に応じた変化を容認する姿形を小楠や海舟に見る、それは蘇峰の自己存立の後背にあった。一つの仮説である。

今一つは、蘇峰の生涯の生のあり方についての、後背にある一景である。先に『時務一家言』の中、蘇峰は遼東半島割譲にかかわり前記のようにその地を踏査し「以て将来大陸発展の経緯」を立てんとしていたことを記した。私はその「経緯」について、その時というより、蘇峰の生の中に一つの下絵が存在していたのではないかとも思うのである。蘇峰後景の一端である。すなわち、その生のあり方と殆ど同形のそれを勝海舟、吉田松陰が提示している。

海舟の言説からみる。

「兵庫海軍練習所の事は、これまで世間に秘して居たけれど、今になつては、もはや公にしてもよからうからこれを君に見せう。（とて『海舟秘録』を示さる。中に曰く）

文久の初、攘夷の論甚だ盛にして、撰海守備の説、亦囂々たり。予建

議して曰く、宜しく其規模を大にし、海軍を拡張し、營所を兵庫・対馬に設け、其一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三国合従連衡して西洋諸国に抗すべしと。」（勝海舟『氷川清話』〈平12・12 講談社学術文庫〉）

朝鮮、支那、そして西洋諸国に及ぶ。海舟の構想である。そして、同様の展開を松陰の言説に見る。蘇峰言及の二例から挙げる。一つは『吉田松陰』（明26・12 民友社 〈昭56・11 岩波文庫〉）の中。蘇峰は松陰の攘夷論について「無謀の攘夷論に非ず」、
「その立意誠実にして、また一種の経綸ありし」として次のように記す。志のあり所として少し長く引く。

「彼は神奈川条約調印の後においては、最早主戦論を擲てり。その安政二年三月月性に与えたる書中の一節に、『魯墨講和一定す、決然として我よりこれを破り信を夷狄に失うべからず、但し章程を厳にし、信義を厚うし、その間を以て国力を養い、取り易き朝鮮、満洲、支那を切随え、交易にて魯墨に失う所は、また土地にて鮮満にて償うべし』と。また同年四月、来原良蔵に与うる書にもいえり、『癸丑、甲寅は一大機会なりしに、乃ち坐してこれを失う。然れども事已に往けり。今の計を為さんには、和親して以て二虜を制し、間に乗じて國を富まし兵を強くし、蝦夷を墾き満洲を奪い、朝鮮を來たし南地を並せ、然るのち米を拉ぎ欧を折かば、即ち事克たざるは無し、向の機を失いしは未だ深く惜しむに足らざるなり』と。」
このように提じ、次のように釈する。
「ここにおいてか知る、彼は既に主戦論者に非ずして和親論者となりしを。ただその敵愾の本領に至つては、少しも変ずることなく、い

わゆる侵略主義を以て、國權を外に耀かし、弱を撃ちて強に及ぶの策を執りしや、火を暗るよりも明らけし。」

ここに一つの論定を見る。「満洲」、「朝鮮」、「南地」、「米を拉ぎ欧を折く」と言う「計」と、「いわゆる侵略主義を以て、國權を外に耀かす」という「策」とをもつ論要である。蘇峰は松陰にその計と策とを見る、そして、それはまた、蘇峰自身の後に行う「経綸」であった。

今一つは、『第二天然と人』（明40・4 民友社）に収録されている「松陰先生」（明37・10・17）の中の一節である。蘇峰は松陰の言として次のように記す。

「彼の志や、固より世界的政策の上にある。幽囚録は、彼か二十五歳の作也。之を読めば、彼の胸中には、既に帝國主義の萌芽あり、彼の眼底には、東洋政畧の統領ありしを知る可し。彼は、西伯利、沿海州等の処分を説けり、彼は朝鮮を保護國となし、台湾を取り、満洲の地を割く可きを説けり。彼の予言は、今や半ば適中し、且殆んど悉く適中しつゝあり。彼は固より、無謀賢く無き侵畧論者にあらざりき。彼は進むを知ると同時に、止まることを知りぬ。攻むると共に、守ることを知りぬ。誰れか謂ふ今人の識見は、古人に優れりと。」

右の二つの論は、いずれも蘇峰による吉田松陰論及の一節である。そしてそれはまた、蘇峰自身の世界的政策の「経綸」でもある気配がある。遼東半島割譲にかかわり、旅順に赴き、「将来大陸発展の経綸を立てん」と「企て」たとき、蘇峰の意中にこのことは往來していたのではないだろうか。それはまた蘇峰生涯の生を領導し、生の実存と

なっていたのではないか。「日本―朝鮮―支那―南地―英米」への経緯を内に置くと、「平民主義―自由主義―国家主義―皇室中心主義」と改めゆく思想・思考体の「変化」は蘇峰にとって、まさしく「進化」の道程であつたのではないか。蘇峰の生は、これら小楠、海舟、松陰などの論要が内界通底の基調低音の一つとして存在していたのではないかと思量する^②。

二、蘇峰変容の余映―北村透谷との別れ―

蘇峰変容の論脈の中、その変容余映として北村透谷との別れがあつた気配がある。しかし、その別れは、透谷死後であり、そしてまた蘇峰がどれだけ透谷を意識していたかも不明である。だが、私は、その別れの道程の中に明治後期、日本「近代化(西洋化)」の変質、大正昭和にかけての「近代」変容の前景があることを思う。以下、それを辿る。

(1)、蘇峰今一つの変容

蘇峰の変容について、今少し記しておきたい。しかし、記したようにこれは蘇峰にとつての変容だけではないかもしれない。大きく日本近代化の道筋から考えるに、個から国体中心への大きな反転と考えられるところがある。そのことについて蘇峰変容の一端を一つの証例に探る。

先の『時務一家言』の変容から、『国民小訓』出梓への道行きの間、蘇峰は、『第八日曜講壇』(明40・9 民友社)に次の五つの連続小論を収載している。「地方の青年に答ふる書」(明39・2・

18)、「再度地方の青年に答ふる書」(明39・2・25)、「三度地方の青年に答ふる書」(明39・3・4)、「四度地方の青年に答ふる書」(明39・3・11)、「五度地方の青年に答ふる書」(明39・3・18)。(以下、省略して、「初」、「再度」、「三度」、「四度」、「五度」の形で記す。)

これら五つの論は、「人生問題」や「心靈問題」などについて「煩悶」する地方の青年からの相談に答えるという形で記した、国家や国体にかかわる蘇峰の自説の提示、生の具体化への提要である。

論点は大きく二つある。一つはそういった「煩悶」への強い疑義、今一つは「恋愛」否定の論である。前者について、「元来小生は、所謂の人生問題の研究と申すことが、氣に喰はぬ事に候。」、その日その日に為す可き事は沢山あるので、「餘計なる人生問題杯に、執着し、自から求めて煩悶するが如きは、甚だ以て不心得千万の儀に候。」、「神を見たとか、神と交通したとか」を論ずるを「狂幻界を現するもの」と拒否、次のように記す。

「人生問題の研究者〓精神的煩悶広告者〓神人交通者〓慢心的精神病者〓二十世紀の泣虫も、或は多少社会を賑かならしむるの道具かと存候得共。貴君の如き、前途有望なる世帯が、其の仲間入をせらるゝの一条は、甚だ以て痛恨に禁はず候。」(「初」)

精神内界や他界、幻界の否定である。

当代、藤村操の哲学死(明36・5・22、日光華嚴の滝、投身自殺)、綱島梁川が、「神の子」として、神との融合を論じた「子が見神の実験」(明38・5)、「子は見神の実験によりて何を学びたる乎」(明38・11)が、この前にある。

第二に難ずるのは「恋愛」についてで、「妄想者の幻影」として、恋愛を小説などで、「神聖杯」と言うのを痛烈に批判する。

「若し小生の愚存を、卒爾に開陳せば、恋愛杯と申すことは、青年諸君の口にす可らざるは勿論、叶ふことならば、決して此に心を煩はし、思を悩ます可きものに無之と存候。得恋の必らずしも、得々たる価値なきは、失恋の必らずしも、失々たる価値なきが如し。由来恋愛其物が、吾人を動かす可き代物に御座なく候。」（「再度」）

代つて蘇峰は、「青年青女の恋愛杯は、何うでもよし、斯るたわひもなき事に、煩悶するとは、以ての外也。若し恋愛する程ならば、一層大きく出て、国家と御結婚可然旨、申進候処。」と提唱する。「愛情なき国家と、いかで結婚出来可申哉」との疑いには、「結婚ありて、而して後愛情あるものに候。結婚すれば、自然に愛情は、發揮するものに候。此の愛情が、一番頼母敷候。即ち恒久的、耐久的のものに候。」（「三度」）と記す。これは蘇峰自身の体験から来ている。蘇峰は父の決定に従い結婚、しかし、終生その後の結婚生活を嘉している。次のように続ける。

「国家と結婚するとは、只だ斯身と国家とが合体することに候。自個の身中に、国家を呑込むことが出来ねば、国家の腹中に、斯身を呑込まれても、差支無之候。要するに身を以て国に繋ぎ、国を以て身に繋ぎ候迄の事に外ならず候。」とて、「憾む所は、此の有為の国に住し、此の有為の時代に生れ、而して徒らに煩悶とか申す病氣に取り付かれ、空しく其の歳月を送ることに候。」（「三度」）と繰り返し、「恋愛」などに「煩悶」する生を貶ずる。

蘇峰は、更に、高山樗牛の「人性本然の要求」としての「美的生

活」（「美的生活を論ず」明34・8）論など、加えて、中国の竹林の七賢人などを難ずる。樗牛や七賢人について、「小生の所見を、忌憚なく申せば、美的生活とは、豚的生活に候。豚が汚泥の中に、溷集する生活の情態に候。即ち美的生活とは、醜的生活の事に候。」、「而して小生の眼中には、竹林の七賢杯は、竹林の雀にも、劣り果たる動物と映じ候。愛国が野暮臭しとならば、野暮臭からぬ国に帰化ありて可然候。」（「四度」）と論じ、対して国家、国体への参加を促す。

かくて、「何事も力に候。力なくしては、正義も、博愛も、仁義も、道徳も、唯だ物笑の種子に候。」とて次のように提要し論を閉じる。

「故に第一には、日本帝国を、強固たらしむる事に候。第二には、日本帝国を、善国たらしむる事に候。日本帝国をして、強且つ善なる国家たらしむるには、一に明治青年諸君の、強且つ善なる力によると確信罷在候。」（「五度」）

「人生煩悶」の否定、「幻界」「美的生活」の拒否、当代の藤村操や高山樗牛の世界、加えて「恋愛」至上の世界などは蘇峰にとって忌むべき、不可解な世界であった。文学や芸術の世界回避、蘇峰の内的変化、変容はかくである。

これらの論は蘇峰の国家論策定の一端であり、直接には、藤村操の哲学死、綱島梁川の見神、高山樗牛の美学、そしてゆつくりと文学的地位を確立しつつあった自然主義文学などへの反意であろうが、私はその論容の一端に、北村透谷の文学や思想當為への反意、透谷との別れのような意が含まれているように思われるのである。³⁾そしてそれ

は、日本近代の文学や思想位相展開の変容の一端にかかわる重要な屈折となるところがある。今少し考を進めたい。

(2)、透谷「漫罵」との断層・変容と夭逝――

徳富蘇峰「地方の青年に答ふる書」五編、反意として、藤村操、綱島梁川、高山樗牛、自然主義文学の台頭などがあり、そして、その後景の一端に北村透谷の思想や文学があつたのではないかと記した。蘇峰の難じた「煩悶」や「恋愛」への疑義は、北村透谷の生涯さらには論考群と呼応するものがある。透谷はその煩悶の中、自死を遂げる。

「恋愛は人生の秘鑰なり」と論じた「厭世詩家と女性」(明25・2)、生の苦獄を提じた「我牢獄」(明25・6)、他界を提した「他界に対する観念」(明25・10)、わけて、文学の自律を論じて山路愛山と対した「人生に相渉るとは何の謂ぞ」(明26・2)など、これらはまさしく蘇峰が難じ否定した論群である。前記のように、私はかつて徳富蘇峰と北村透谷とを比して、その文学的論要にきわめて類同するものがあることを呈した。右記の蘇峰が難じた文学や思想は、若き日、その出発期に蘇峰は透谷とおなじ形で表出していた。少し諄いがその蘇峰論理の一端を記す。

詩人は「宇宙の美妙」を探るにありと論じた「新日本の詩人」(明21・8)、「愛」の重用を論じた「愛の特質を説て我邦の小説家に望む」(明22・9)、自然との近接を提じた「天然と同化せよ」(明23・4)、「偉大なる思想は赤心より来る」と論じた「偉大なる思想」(明25・1)などなどの文学や思想論群は『文学断片』(明27・3 民友社)に収載、あるいは、透谷が「内部生命」(明26・5)で外界との呼応を論じた「インスピレーション」論の先行

たる「インスピレーション」(明21・5)、地方青年すなわち「田舎紳士」の有意を提じた「田舎漢」(明22・6)、「赤心を以て宇宙の真相を觀」よと言う「觀察」(明26・4)などを収載した『静思余録』(明26・5 民友社)等の世界は、ただに透谷の文学思想提要に重なる。

蘇峰の文学重視の証例を右論群から一つ引く。詩人を説いて、次のように記す。

「彼は宇宙の美妙を吸収して、之れを同胞の人類に分配するものなり。宇宙の秘密を穿鑿して、之れを同胞の人類に説明するものなり。自から美妙の観念を以て、天地万有より動かされて、更に美妙の観念を以て、人間社会を動かす者なり。而して其動かすや、皮相に非ずして、人間胸臆最後の琴線に触るゝものなり。」(「新日本の詩人」)

ここに二つの断層が生じている。一つは蘇峰の変化・変容と透谷との別れ、今一つは透谷の自死・夭逝である。

蘇峰の変容について。私は先に、海舟、松陰の国家将来の「経綸」とその構想の下絵の上に蘇峰はあつたのではないかと記した。またその「経綸」構想の上では、蘇峰自らの変化などは、蘇峰にとつて問題ではなかつた。「変化」ではなく「進化」であるとさえ論じたことを記した。これも少し諄いが、今一例、先の「五度地方の青年に答ふる書」に記された蘇峰の、文学や芸術否定の論理との隔離・断層を引く。蘇峰はそこで、「四十年間の進歩と発達」、「稀有の時節に生れたるを幸とす」という、論の上部に記した小見出しのもと次のように記している。これも少し長いが引く。

「我が日本帝国が、世界を相手に仕事を為さねばならぬ時期は、今日を外にして、何の時代の歴史に、果して見出し候哉。帝国の最も手の伸びたる日さへも、僅かに鴨緑江辺に、大和民族が進軍したるに止まり候。其の他は内輪の仕事にあらざれば、内輪の喧嘩に止まり申候。所謂の野馬台の詩の『猿犬称英雄』と申すに止まり候。然るに維新開国以来、神武創業の皇謨を恢宏にし、単に鎖国の陋習を打破したるのみならず、知識を世界に求め、世界に向て、大義を布くの大経綸を行ひ、爾来殆んど四十年、著々進行し来り候。即ち王政維新も、廃藩置県も、憲法制定も、議會開設も、將に二十七八年役も、三十七八年役も、抑も又た国民教育制も、国民皆兵制も、皆な此の大経綸を行ふ条目に外ならず候。斯る稀有の時節に生れたるは、如何なる仕合せぞや。苟も心あらん者は、斯身を千億にしても、働きて見度きものと存じ候。然るに花鳥風月に流連し、恋とか、無常とかに浮身を甞す杯とは、以ての外の心得違ひに候はずや。」

維新後「四十年」の日本の伸びは「僅かに鴨緑江辺」という言、「知識を世界に求め」た西洋化の時期、「世界に向て、大義を布くの大経綸」、これはまさに『時務一家言』に記した「将来大陸発展の経綸」の構想、「大事去矣」と嘆じた途と同じうしている。その大業の時、「花鳥風月に流連」することや、「恋」や「無常」に「憂身を甞す」ことは、「以ての外」のことであつたと記す。蘇峰の変容はかくである。これは蘇峰の変容のみならず、維新後の日本近代化（西洋化）の道から国家、国体主義への道の変容の姿形である。日本近代化の道程における一つの断層と考えられはしないだろうか。

今一つは、透谷について。先に、この蘇峰の五編の論の対象は透谷

に及ぶと記した。しかし、これらの論が出たとき、透谷はすでに自死している。透谷が反論する位置も位相もなかった。透谷はその前に、時代を罵している。少し足早に辿るなら次のようである。私は右のように蘇峰の変容を記したが、その前に、透谷も変容を繰り返していた。しかし、その変容は短い期間においてである。象徴的な透谷変容言及を三例挙げる。

「明治文学は斯の如き大革命に伴ひて起れり、其変化は著るし、其希望や大なり、精神の自由を欲求するは人性の大法にして。最後に到着すべきところは、各個人の自由にあるのみ、政治上の組織に於ては、今日未だ此目的の半を得たるのみ、然れども思想界には制抑なし、之より日本人民の往かんと欲する希望いずれにかある、愚なるかな、今日に於て旧組織の遺物なる忠君愛国などの岐路に迷ふ学者、請ふ刮目して百年の後を見ん。」（『日本文学史骨』明26・4～5）

「精神の自由」を論じ、近代日本の行方を讃じ、「忠君愛国」を「旧組織の遺物」と論じる。蘇峰との明晰な別れがここにある。

しかし、その夢は瞬時にして消える。

「今の時代は物質的の革命によりてその精神を奪はれつゝあるなり。その革命は内部に於て相容れざる分子の衝突より来たりしにあらざ。外部の刺激により動されて来たりしものなり。革命にあらざ移動なり、人心自ら持重するところある能はず、知らず識らずこの移動の激流に投じて、自ら殺るさざるもの稀なり。その本来の道義は薄弱にして以て彼等を縛するに足らず、その新来の道義は根帯を生ずるに至らず以て彼等を制するに堪えず。その事業その社交、その会話その言語悉く移動の時代を証せざるものなし。」（『漫罵』明26・10）

今の時代は「移動」なり、「内部」の「衝突」よりきたものでない。事業、社交、会話、言語「悉く移動」の時代を証せるもの、透谷畢生の嘲罵である。しかしてその根柢を証せる道義はあるか。透谷の思念はそこで途絶する。「本来の道義」、それは何か。それはあるのか。悲しき嘲罵として透谷の心内に問いかけてくる。

道を求めて透谷は一夕、「大空」を彷徨する。

「漠々たる大空は思想のひろき歴史の紙に似たり。彼処にホーマーあり、シエークスピアあり、彗星の天系を乱して行くはバイロン、ポルテアの徒、流星の飛び且つ消ゆるは泛々たる文壇の小星、吁、悠々たる天地、限なく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に対して暫らく茫然たり。」（「一夕観」明26・11）

透谷変容の三転である。しかし、透谷はこの「大空」に身を寄せることはできなかった。明治二十七年五月十六日、自裁して果てる。蘇峰「変容」の断層に対して、ここに今一つの大なる断層があった。蘇峰の変容に対してこれを夭逝と言うべきか。

ここで、一つの恨事は、透谷に日清戦争体験のないことである。蘇峰変容は、日清戦争後の遼東還付にあった。日清戦争は、透谷自死直後の明治二十七年、六月十二日の仁川上陸、もしくは七月二十三日の豊島沖海戦に始まる。

先の「地方の青年に答ふる書」は明治三十九年二月〜三月、透谷にその反意を表する時間はすでに失っていた。

おわりに——二つの断層——

前記のように、私はかつて徳富蘇峰と北村透谷の近接性について小考した。本稿は、それにかわりながら、蘇峰の前・中・後期を辿った。幕末、維新期の思想開示のもと、個の確立を図った前景、明治中期、その伸張と変化、そして国家の進展を企図した明治後期から大正昭和にかけての後景。そこでの前景と後景とは蘇峰の内部では相呼応するところがあった。蘇峰にとって中期はあくまで進化の一過程であったかもしれない。前景、幕末維新前後の小楠、海舟、松陰直流の国家意識、後景はそれらに連動する国体への意識、その蘇峰の内景に異なる位相はなかったのかもしれない。そして、前景の動向に透谷との類同の姿形があった。だが、二人は蘇峰、透谷それぞれの断層によって大きく分化、道を分つていく。少し事を大きく言えば、その分れの形相が日本近代から現代への大なる分岐となつていったところがある。これら二人の道程について改めて最後に集約しておく。

まずは、蘇峰の道程について。これまで辿つたように蘇峰は日清戦争後、大きく「変容」した。その変容の後背に、横井小楠や勝海舟、吉田松陰の存在があったのではないかと断想した。蘇峰が繰り返し提示したように日清、日露戦争後、国家は「力也」と変容、平民主義、自由主義、平和思想から国家主義、帝国主義、皇室中心主義と大きくその思想中核を改めていった。その断層の過程、初期蘇峰は日本近代のオピニオンリーダーとして動いた、個の解放、平民、民権、自由、進化論そして平和主義の論要、それらを中心・後期根底から改めていった。文学や芸術、幻界等への思考とも別れた。

少しく強論するなら、日本近代・近代化への道程は、蘇峰のみならず、近代化（西洋化）の道から、日本国体化へ変化していった。『将

来之日本』から『国民小訓』への道行きである。それは、日本近代から現代への一つの道程ともなり、日本近代化は何かを失い、新しき何かを探っていった。日中戦争から大東亜戦争（太平洋戦争）は、その一つの行程となる。

一方、透谷の道程について。透谷は秀抜なる論容をもって日本近代化の指針者の一人として、文学、思想に動いた。「内部生命」を重用、個の自立、解放、内界外界の開示を追って日本近代化の先導の一端になった。

しかし、その成果を性急に求めて、時代の嘲罵たる「漫罵」を提して自死の道を進む。私は自死と言うより夭逝とも称したい。「漫罵」の嘲罵は、日本近代化における大なる命題の一つであった。私は「漫罵」と同質の提示に夏目漱石の「現代日本の開化」（明44・8）があることを中心に二人を比照したことがある。⁽⁴⁾透谷と漱石、同年の生まれ、しかし、透谷は十年早く世に出、十年遅れて漱石はそれを追った。透谷の「移動」に対して漱石は前論の中、「名案も何ない。たゞ出来るだけ神経衰弱に罹らない程度に於て内発的に変化して行くがよからう、」と嘆じた。

私は「漫罵」の論要の時代的評定とその後継について「北村透谷『漫罵』の射程」として、その後代への展開を探った。⁽⁵⁾透谷夭逝にかかわる透谷断層の継承についてである。透谷、漱石の「近代化」疑義は「現代」に及ぶところがある。私はそこでは、蘇峰後期の存立を「超近代」と措定した。

以上、蘇峰、透谷における二つの変容と断層、日本近代から現代への一階梯についての断想である。

注

(1) 「北村透谷と徳富蘇峰」（昭41・3『国文学攷』第三十九号）

「北村透谷と徳富蘇峰―その文明批評の連関性について―」（昭42・5『日本近代文学』第六集）

（両論については、のち、拙稿『北村透谷と徳富蘇峰』（昭59・9 有精堂出版株式会社）に収載。）

(2) 私はかつて、横井小楠実学にかかわりながら展開した小楠、蘇峰、透谷三者の意想展開と乖離について小考した。今考はその一端である。

「横井小楠実学の一系譜―いわゆる透谷的なるものの反措定―」（昭45・8『日本文学』第十九卷第八号）

「透谷における発想の限界―儒学共同体の光芒―」（昭49・2『近代文学試論』第十二号）

(3) これらも、前掲『北村透谷と徳富蘇峰』に収載。
なぜ透谷か、その一因に蘇峰の視界に二つの『透谷全集』の出梓があったかもしれない。ただ、恨事は、この『透谷全集』に、のちに触れる「漫罵」が収載されていないことである。

島崎藤村編『透谷集』（明27・10 文学界雑誌社）
星野天知他編『透谷全集』（明35・10 文武堂。大4・2、国文館書店より二分冊で発行。）

(4) 「北村透谷と夏目漱石―その内的呼応について―」（平31・

5 『北村透谷研究』第三十号

(5) 「北村透谷『漫罵』の射程―表層としての近代・反近代・超近代―」(令5・5 『北村透谷研究』第三十四号)

(まきはやし こうじ、広島大学名誉教授)